

教育現場 学校図書館の日常から

明星学苑 明星中学高等学校

鬼丸 晴美

東京大学 大学院教育研究科

今井 福司

専修大学 文学部

野口 武悟

ライブラリーニュースNo.13に執筆いただいた明星中学高等学校 鬼丸晴美氏と、東京大学 今井福司氏に、学校図書館についてどうなるんだろうという素朴な疑問を持ちかけたことがきっかけとなり、明星中学高等学校図書館の見学を兼ね、この夏座談会を行った。共通の知人である学校図書館をテーマにされる専修大学 野口武悟氏にも参加いただいた。

学校図書館の現状と課題についてお話を聞かせてください。

今井 全国の小中高等学校には、学校教育法に基づいて設置認可が行われ、施行規則第一条にある図書室または図書館を設ける件により、建設時には図書室・図書館が造られています。どんな物を置くのか、どんな人が配置されるのかについて学校教育法にはその規定はなく、学校図書館法、各種文部科学省の基準、SLA



の基準に則るしかないのが現状です。

また、人について考えた場合に、12学級以上の学校には司書教諭を置きなさいと盛んに言われております。学校基本調査によると、11学級以下の学校ってどの位あるかというと、小中学校のデータですが、半数以上が、それに当たります。少子化の影響だと思われれます。義務で置かれるといつても、全ての学校に司書教諭が配置されている訳ではないのです。

また、学校図書館図書標準から、学級数に応じて冊数の算定がされておりますが、新しき、新刊の基準はないために、図書館開館時の冊数のままでも基準クリア出来てしまいます。個々に課題として議論はされますが、進展がないまま現行制度に則り運用されているのが現状といえます。先生方が学習指導要領や学校教育法の延長に図書館をどう捉えるかについて、関心があります。

野口 学習指導要領をじっくり読むことさえ、忙しすぎて余裕がないという先生も多く図書館にまで眼が行ってないのが現状かと思えます。教育の現場に図書館をどう浸透させていったらよいのだろうかと考えています。

鬼丸 教員は皆に忙殺されています。図書館が円滑に動いているところは、先生たちも子どもたちも安心して利用ができ活性化が進みます。ある私立中高で

は学校図書館が学校教育の中心に置かれ、教科の枠を超えて読書指導が進められていると伺ったことがあります。読後にはこめんと・読書感想文を提出し、担任と司書教諭が確認をするそうです。「図書館は学校の心臓部だ。」を実践されている。明星中高も学校を挙げて英語の多読多聴を進める中で図書館の役割は一定以上のレベルまで出来ていると思います。

世の中の移り変わりと同様に児童・生徒が多様化してきているといわれ、学校現場にも変化が現れています。「学校の先生の言うことは聞く」「学校へ行くのは当たり前」という時代の概念が通用しなくなり学校そのものが変化してきている。学校に対する期待値も様々です。教育の崩壊といわれる中で、何をどのようにして子どもたちに生きるすべを体得させていくかということや学校図書館という現場で考えると「読書しかないでしょ」と私は考えます。読書は人生の糧になるものだと思います。図書館は学校図書館だけでなくどの図書館も各分野の図書資料を揃えて常に利用者を守っています。特に教育機関では主役である児童・生徒・学生という利用者に対して大人たちの責任として尽くすことが一義だと思っています。

野口 指導要領の改訂も、輪を掛けて負担になっていないかと思えます。高校には科目として「情報」がありますが、理系科目商業科目担当教員が、情報の教員免許講習を受講し教室に立つケースが多いようです。残念ながら、図書館と結びつくような観点を持つての受講はほとんどないように思います。

鬼丸 技術・家庭科の技術の部分が情報化となり、的を絞って資格講習が積極的

に組まれた時期もありました。家庭科の教員が情報の授業をしているところもありました。教員は走り、ゆとり教育の中でゆとりを感じられませんでした。

今井 情報科の教員免許を取るにしても、人文系大学での取得はカリキュラムで設定されていないことが多く、教育学系の大学や、いわゆる理系の大学の卒業者に取得者が偏る実態があります。

野口 教員の課題もありますが、2006年に発覚した情報の履修漏れの例にもあるように、授業は設けていても優先順位が低く、オマケ的扱いなのかもしれません。大学受験を念頭にした学校、生徒、父兄にとつて、受験科目にないものへの扱いは低く、情報や芸術分野は軽視される傾向がある。

鬼丸 学校教育の在り方そのものが変化し、教員の資質、スキルも変化してきている。小学校以外は科目の専門性を重視しているが、教養教育的な側面が見落とされやすい場合もある。社会性や文化レベルにおいても自覚が重要だと思う。

野口 大学の教員にも言われているように、耳が痛いな。

学校教育への期待

鬼丸 児童、生徒が学校や授業というものに抱く概念が変化したときに、図書館の役割とか使命とは何かを改めて問い直し、癒しの空間であつてもいいのかもしれないと考えました。朝から晩まで大人並みの忙しい日常で、図書館に求めるものは本に囲まれた空間でほっと一息つけることかもしれないです。子どもたちを提供できるサービスは癒しです。

今井 教育の質の低下についての話はあちこちで聞くんですが、どうなんだろうと考えていました。一時期、ちゃんとした教育を受けて、そこそこ偏差値の高い大学に入れば、就職やその後の生活で成功するという一種の神話がありました。しかしバブル期以降は、一部を除いて成り立っているとは言えません。教育を受ける動機の前提になっていたものが崩れてきていて、今までのやり方が通用しないんだと思います。

鬼丸 現場はそうは感じてないのかもしれないですよ。

野口 現場だけでなく、親も従来の価値観にとらわれているんじゃないか。

鬼丸 ただ、子ども達の知的欲求は確かにあるんですよ。

今井 以前、高校図書館を調査しました。進学校、総合高校、地元密着型高校それぞれに、図書館が機能しているかを見ってきました。学校の形態も、サービスもまちまちでした。

制度や、モデルに固執し議論するのでなく、図書館の数だけ、図書館の姿があっても良いような気がしているんです。多様にあっても良いのに、固定のモデルを求めているのはなく、活き活きとしたその学校ならではの図書館があつていいように思います。大学では制度、モデルを研究するんですが、それだけではないことを感じました。

鬼丸 この図書館の引越しの際に、図書館情報学を専攻した作業担当と、一ヶ月かけて図書の配架整理をしました。「大学で学んだことは何なんだ」って言っていました。学校図書館のイメージは、朝から晩まで、司書は自分の好きな本が読め

る。本は貸さない、失くさない、管理することが仕事だと理解していたようです。**野口** 古き良き時代の話のようですね。学校図書館の認知度、理解度はまだまだ低いのかも知れません。その中から学校図書館活性化を考えています。

鬼丸 人と物の話で、少なくとも日本には物がある。図書館には古くても本はある。本はあるけれど、運用する人が少ない、いないということが課題だと思います。人を育てるという基本を踏まえ、学校図書館が期待されるような存在にするのも人という存在が大切だと思います。図書館は第二の保健室といわれるようになって久しいです。そんな現在、学校図書館の重要性に期待をする人材を大学で育てて欲しいです。

子ども達の居場所

野口 学校図書館の持つ空間性って重要だと思えます。空間十人の存在によって活かされます。メンタルな課題を抱えている子ども達に、図書館が居場所になる可能性がります。でも、鍵が掛かっていたり、人が居ないと、それさえも無くなるんです。

鬼丸 思春期の子ども達にとって、大人の存在は鬱陶しいものだと思います。図書館は常に大人が居るにも関わらず、子どもたちは図書館に来ます。必要に応じて私はガミガミも言いますが、教室での関係性と違ったコミュニケーションを、図書館に来て楽しんでいるのかもしれないんです。図書館に本を置いておくことで、どんな本がいいんだろうとか、教育に適した本だろうかとか議論することも大切で

すが、主役は生徒・学生であり、司書教諭や司書が居るということが重要なのです。そこに小さな社会が生まれるわけですから。生徒が社会と向き合う、大人と向き合うこととしても図書館が果たせる役割は大きいと思います。

今井 教員になる人に図書館経験がない資格を取って司書教諭になっても図書館を理解することが出来ない。図書館を使いなさい、教育で使いなさいといわれても何やっていいのか解らないが正直なところだと思えます。もともと、先生方が子ども達に对应できないのは、パターンが解らないことだと思えます。鬼丸先生は子ども達に向き合っているんで、Aさん、Bさん、Cさん各々に対応の仕方が違ってくるんです。大学の講義でも、学生は「子どもってこういうもんだらう」という思い込みがあつて、パターンを外れると急に対応できなくなっちゃうんです。

野口 パターンとあわせて、学生のマニユアル志向が強いことです。「マニユアルにないことは対応できません」なんです。

鬼丸 ワンパターンの思考回路が強いのもかもしれません。

今井 学校内では、教科書・指導要領以外で、教育を担保しているのは図書館ではなからうかと思つてます。ライブラリーニュースNo.13に鬼丸先生が書かれたことは、理想像かなと思いましたが、一人一人に眼が向いていて実践してらっしゃるのを感じました。

鬼丸 学校にいる教員・職員・司書・警備員全員が、子ども達にとって先生なんです。教育に欠けるものは一つもない全員が子どもたちのことを一人一人大切

に思つて育てていくんだと思います。その一員として図書館を舞台に、本を題材に展開していくんです。

今井 お話を伺っていて、鬼丸先生は司書教諭だなと思えます。子どもを大切にする先生であつて、司書教諭として図書館で活動されていることが、大切に皆さんにも共有いただきたいです。図書館という場所が、子ども達の旅立ちの準備、本から教科以外の知識・知恵を吸収し「ちから」にする場所と捉え、一冊一冊案内することが出来る空間であると再認識しました。

素敵な図書館を見学した後、閲覧テーブルを囲んで、お話を伺いました。教育現場の抱える問題・課題の大きさを感じるとともに、可能性・期待を感じました。お話は長時間にわたりましたが、一部をダイジェストとしてお伝えします。

(編集部)



左より鬼丸晴美氏、野口武悟氏、今井福司氏